

「社会科教育法」教育の教授方法に関する研究 (4)

—新教育課程と「受講者ノート」の活用—

大橋 忠正

(社会科教育)

I 問題の所在

大学全入時代を迎え日本の大学の教育力の向上が問われている。各大学では「授業の内容や方法の改善を図るための組織的な研修や研究」、FDの取り組みが活発に行われている。大学授業をいかに改善するか。その模索の中に学生が希望する双方性や参加型の授業がある。大学が本務とする理論的で体系的な知識伝達の講義科目の中にそれをどのように組み込んでいくかが今後の授業改善の焦点になると学生の意識調査結果をもとにした報告がある¹⁾。この「一方通行でない授業への試み」は以前からあり²⁾、双方向型の授業への要請が近年一層増してきていると言える³⁾。

当然、この授業改善は大学教育の質の保証と結びつくものでなくてはならない。大学教育の質とは学部、専門領域によって異なるが、教員養成大学・学部にあっては教師教育の視点から考える必要がある。教育学、教科教育学、心理学等の成果の伝達を前提としながらも、学校現場が直接求める授業内容、授業方法、更には学生の教職への関心・意欲の喚起までを教育内容として取り上げることが望まれる。大学の教職課程の役割は「教科指導、生徒指導等に関する最小限必要な資質能力の育成」にある⁴⁾。しかも、その能力育成には教育の持つ不易の側面と流行の側面が伴う。流行の側面でいえば時の教育課題に応える資質能力の育成である。

平成20年1月、中央教育審議会初等中等分科会教育課程部会が「幼稚園、小学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」答申した。平成20年版学習指導要領改訂の

骨格の公表である。10項から成り、9項目には「教師が子どもたちと向き合う時間の確保などの教育条件の整備等」の記述がある。「生きる力」の理念の実現に向けて、個々の子どもの知識・技能の習得、思考力・判断力、表現力等の育成、言語活動等の充実が改善事項とされ、それには「教師が子どもたちと向き合う時間の確保」が不可欠であるとの指摘である⁵⁾。答申はそれについて教職定数の改善、時間確保、指導の諸方策など条件整備を上げている。しかし、授業の中で教師が子どもと向き合う時間における教育の在り方こそ課題であり、そこが新教育課程の重要なポイントとならなくてはならない。

筆者はこれまで大学授業の活性化と学習の質的向上を意図してコミュニケーション重視の教授方法を継続研究している。授業における「受講者ノート」活用の機能の究明である。すでに、「受講者ノート」の原理の整理と「受講者ノート」が学生の論理的思考・記述の基礎学力（以後、論述基礎力と記す）の育成に有効であることを明らかにした。さて、この「受講者ノート」活用の授業展開の中にこそ、現在、問われている「教師が子どもと向き合う時間の確保」が真に求める教育の意図が内在していると考える。

そこで、本小論では本学の多人数大規模授業における「受講者ノート」活用の機能の検証と「受講者ノート」活用を手がかりに、新教育課程改善で提起された「教師が子どもと向き合う時間」の真の教育意図について考察していきたいと思う。

II 新教育課程と「受講者ノート」活用の構想

1 「社会科教育法」教育における「受講者ノート」活用の理論

授業とは、教師、学習者、教材の三者で構成される。教材に媒介された教師と学習者の相互主体的な活動過程が授業の本質である。その中核は教授・学習過程 (teaching-learning process) にあり、教師の教授活動と生徒の学習活動との協同により成り立つ授業の過程である。その教授・学習過程には次の原理が付随し、「受講者ノート」にはその原理を起動させる機能がある⁸⁾。

(1) 教授・学習過程成立の「学習者理解」の原理

教授活動には学習者理解が前提となる。二百名を越す学生が対象の場合も例外ではない。授業計画実施の期間中、各学生の受講者ノートを継続的に捉えると、当人の筆跡、文体等の外的表現の特徴のほか、授業内容の理解、能力、態度に関する学力評価、及び、内的特徴である認知傾向、感受傾向、操作傾向、更には自己教育性促進の経路の理解も可能になる。「受講者ノート」はこうした個別の学習者理解を可能にし、教授・学習過程成立の条件を充たすことになる。

(2) 教授・学習過程成立の「三方向のコミュニケーション」の原理

教授・学習過程における教師と学習者の相互交渉の手段としてコミュニケーション活動がある。坂元昂は授業を教師や教材を含む教育環境とコミュニケーションによる行動変容の過程と捉え、そこに本質的で単純な三方向のコミュニケーションがあるという⁹⁾。「行って、返って、また行く」という平易な表現によるこの活動の維持は、授業成立には不可欠であり、「受講者ノート」はこれを可能にする。

(3) 教授・学習過程成立の「自己教育」の原理

教授・学習過程の目的は学習者の自己教育の増進にある。本来、授業の究極のねらいは教師の伝達過程に触発された学習者の発達過程にあり、授業の目的は学習者自身が自己発達を遂げる自己教育力の育成にある。梶田叡一は自己教育性を構成する要素として基本的な四側面・七

視点をあげている。(図1) 四側面とはI「成長・発展への志向」II「自己の対象化と統制」III「学習の技能と基盤」IV「自信・プライド・安定性」である⁸⁾。「受講者ノート」は、学習者が内に持つこの四側面に作用し、自己教育性の促進を可能にする。

(4) 教授・学習過程成立の「自己学習」の原理

教授・学習過程の目標は学習者の自己学習の増進にある。自己学習とは「学習意欲と学び方の習得」である。自己学習と自己教育の違いは自己教育が「学習意欲と学び方の習得、生き方の探求」という陶冶と訓育の統合の概念であるのに対し、自己学習は訓育を含まない陶冶の概念である。学び方を学びつつ学習課題の解決に取り組む意欲、能力である⁹⁾。「受講者ノート」は、その学び方にかかわる「問いを立てる能力」の涵養を可能にする。

(5) 教授・学習過程成立の「学習集団成長」の原理

教授・学習過程成立の環境として学習集団の整備・成長がある。学習集団とは「共通の目的をもって相互作用をする成員の集まり」であり、学習という共通の目的のもとに一定期間、相互作用をもつことにより、成員間に心理的一体感と自己の行動基準を方向づける作用を持つ集団をいう¹⁰⁾。「受講者ノート」が対象とする受講集団は、初等、中等教育における学級・学習集団とは異なる短期の集団である。生活場面はなく、目的的に集うに過ぎない成員相互の関係が希薄な学習集団である。「受講者ノート」はその受講集団の成長とモラルの高揚までを可能にする。

2 新教育課程の理念と「受講者ノート」活用の構想

「教師が子どもたちと向き合う時間」で期待される教育意図と方法について中央教育審議会答申では「一斉指導の方法に加えて個に応じた教育の実施」と記すに留めている¹¹⁾。新教育課程の理念に基づき、そこで期待されるねらいと方法を構想すると次の教授、反応受容、評価・助言の育成活動が考えられる。そのねらいは、

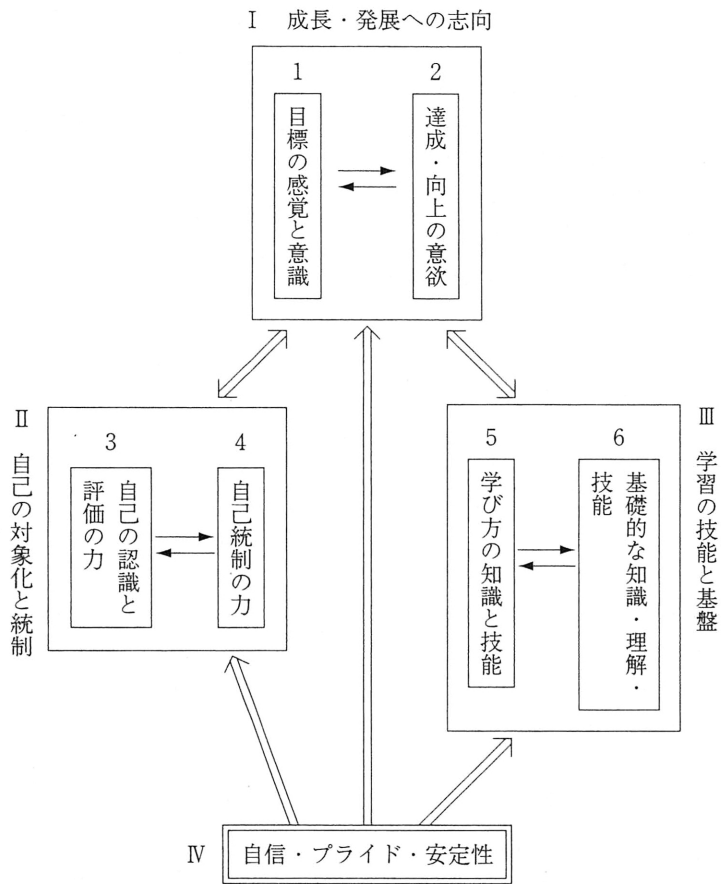


図1 自己教育の構えと力—主要な諸側面

①授業における個別の学習者理解, ②知識・技能の習得と思考力・判断力, 表現力の育成, ③「生きる力」の育成, ④学習者相互の学びの共有の場の設定である。教育は対象の理解に始まる。答申内容の②知識・技能の習得と思考力・判断力, 表現力の育成, ③「生きる力」の育成には①授業における個別の学習者理解が欠かせない。また, 「他者と共によりよく生きる生き方の探求¹²⁾」は授業集団における「生きる力」の態度化に当たる。この4点の教育意図の達成には三方向のコミュニケーションの維持と学習者の学習状況の反応表現が必要になる。

以上の教育意図と方法は大学授業における「受講者ノート」活用の機能と合致する。

i 「受講者ノート」の活用により, 「三方向のコミュニケーション」が維持され, 個別の学

習者理解が可能になる。学力実態のほか個別の認識, 能力, 態度(認知傾向, 感受傾向, 操作傾向)の傾向の理解, 過去の学習経験, 生育歴の実態把握などが「受講者ノート」から読み取ることができる。

ii 「受講者ノート」の活用により, 論述基礎力の育成, 自己学習力の涵養が促され, 講義内容の知識・技能の習得と思考力・判断力, 表現力の育成を図ることができる。

iii 「受講者ノート」の活用により, 「生きる力」と同意語の「自己教育性」が促進される。教授, 反応受容, 評価・助言の一連の教師の活動の中で, 「受講者ノート」の記述を通して学生は, 自己教育性の四側面にかかわる活動を始動するようになる。

iv 「受講者ノート」の活用により, 受講者相

互の学びの共有の場が設定される。他者と共によりよく生きる生き方・学び方が促され、講義計画実施の進行に伴い受講集団のモラルの高揚が期待できる。

このように、教員養成大学・学部での授業の中で「受講者ノート」を活用すると、学生は「教師が子どもたちと向き合う時間の確保」が求める教育の意図と方法を理解し、その取り組みに関心を示すようになる。

Ⅲ 「社会科教育」における「受講者ノート」 活用の実践 1

大講義「社会科教育方法論」(2008年前期)における「受講者ノート」の原理の検証

1 授業計画の概要

平成20年度「社会科教育方法論」は、次の計画で実施した。社会科の本質、性格、目的に関する内容は3回、社会科の教育内容に関する内容は4回、社会科の授業構成と評価に関する内容は4回、社会科教師の在り方に関する内容は2回である¹³⁾。

2 「受講者ノート」活用の計画

(1) 「受講者ノート」の配布と内容

「受講者ノート」とは、個別적으로는、授業者の講義内容に対する受講者の主体的な認識、思考、意見等を記す用紙と全体的には、その内容からなる印刷物をいう。毎回、講義終了10分～15分前に記述させ、その内容の主なものを十数名選んで印刷、翌週、個別の用紙の返却と共に受講者全員に配布(A4サイズ2枚)する受講者の反応記録である。毎回、公平を期して新掲載の学生のノートの一部、又は全文を優先的に取り上げるが、該当項目に適切に触れた記述が見当たらない場合は重複学生のノートを適宜加えることにする。

(2) 「受講者ノート」の評価

講義の中で学生の論述基礎力の育成を図るには、講義内容の理解の叙述が前提になる。学生の主体的思考を重視するとはいえ、講義テーマ・講義内容から逸脱した叙述であってはならない。講義時間における学生の論述基礎力支援は、講義内容の理解の深化と発展に資する過程

で行うのが妥当である。そこで、毎時の「受講者ノート」の記述内容の評価は積極的に行い、その評価・助言の蓄積を通して論述基礎力の向上を図る。具体的には、個別の「受講者ノート」に助言の記述と合わせて次の評価を示していく。

A マル：講義内容の理解のまとめと考察に優れる叙述

A：講義内容の理解のまとめと一部考察が見られる叙述

B：講義内容のまとめが断片的に見られる叙述

C：講義内容の理解が不十分な叙述

D：講義内容とは無関係な感想、意見の叙述

第1回(4月10日)の「受講者ノート」では、評価C、Dのノートが多かったため、「評価C、Dのノートへの助言」と題して項を設け、受講者全員に周知を図った。

①講義内容の理解を伴わない主観的な感想を先行させない。

②講義内容の断片的、羅列的な理解の記述は不十分。文相互の関連に努める。

③テキスト、資料を参考にして用語は正しく使用。誤記は理解をあいまいにする。

④講義テーマに基づく内容の理解の記述が心がる。テーマは飾りではない。

3 「受講者ノート」の原理、機能に関する学生の意識

(1) 「受講者ノート」の原理、機能に関する意識調査の実施

「社会科教育方法論」における「受講者ノート」の活用について受講学生を対象にアンケート調査(無記名)を実施した。ここでは「受講者ノート」の原理に関する項目の回答とその理由(記名記述)について調べた。一部、平成19(2007)年度以前の回答も合わせて記すと次の通りである。

1 個別の学習者理解に関する記述

・先生が個人を大切にしていることが感じられた。私自身、正直、真剣に書いていなかった。友人が懸命に書く姿を見てこれではいけないと書くようになった。(I.A)

表1 「受講者ノート」の原理に関する学生の意識調査結果

2008. 7. 17調査

190名回答

機能の項目	とても思う	少し思う	あまりない	全くない
1 個別の学習者理解	152 (80%)	38		
2 三方向のコミュニケーションの維持	146 (76%)	42	2	
3 自己教育性の促進	131 (68%)	55	4	
4 自己学習の促進	132 (69%)	57	1	
5 受講集団のモラルの高揚	136 (71%)	47	7	

- ・平成14年度：学生一人一人を理解しようと努力されている姿。「受講者ノート」をしっかり読んでくださり意欲ができました。(H. Y)
 - ・平成18年度：この講義で初めて“自分を見てくれる”先生に出会えた気がします。「受講者ノート」は自分の理解度を客観視でき、妥協を許さないきびしい評価にはドキドキしましたが、私のやる気の源でした。(Y. S)
- 2 三方向のコミュニケーションの維持に関する記述
- ・自分自身すごく成長したと感じ自分の記述に自信が持てるようになった。三方向のコミュニケーションによる教育の力に驚いた。(M. K)
 - ・平成14年度：大学の講義は「行って」が主ですが、この授業は「返って」「また行く」があり本当に頭を使います。「人間は見つめられるときれいになる」。謎が解けました。(H. S)
 - ・平成16年度：「受講者ノート」、先生が私達の見えていないところでコミュニケーションをとってくださっているのだと改めて感じました。(Y. Y)
- 3 自己教育性の促進に関する記述
- ・「受講者ノート」、1, 2回は書かされている意識が強かった。しかし、書いていくうちに「受講者ノート」記述のため自分の中でもう一度講義をしていくのが習慣になった。自己教育力の促進が意識できるようになった。(T. H)
 - ・平成17年度：今日の講義で何かを掴もう、学ぼうと聞く姿勢、臨む姿勢が意欲的になり、最後にまとめることで理解を深く確かなもの、自分のものとするのができた。意志をもって授業に臨み、理解を文で表す大切さを感じた。(T. T)
 - ・平成18年度：単に私達の理解、書く練習のためだと思っていたが、知らない間に、毎時間、目標と意欲を持って講義に臨むことができた。(K. Y)
- 4 自己学習・問いを立てる能力に関する記述
- ・「受講者ノート」を書いている中で「なぜ？」の問いが生まれた。そこからまた考え直し、再理解するように自己学習力が育成された。(Y. K)
 - ・平成17年度：「受講者ノート」を書くと思って講義を聞くと、「へえっ。～はどうなのかな？」という自分の心の中の声を聞くことができた。(K. M)
 - ・平成18年度：「何について書くのか」「どのように書くのか」「なぜそうなのか」「これでよいのか」。問いがなくては考えることも表すこともできない。(A. S)
- 5 受講集団のモラルの高揚に関する記述
- ・友達の記述と見比べる作業を通して本当の意

味で授業と向き合い、授業内容と向き合い学びを深めることができた。木曜2限は眠くなる時がなかった。(M. Y)

・平成17年度：「受講者ノート」を書くことで金1クラス全体が真剣に授業を聞き、考えることができていた。理想の授業だと思う。(O. Y)

・平成18年度：授業集団のモラルの高揚が教師になりたい気持ちを高めた。(Y. T)

6 その他の記述

・全14回書いてきた「受講者ノート」は単なる学習のまとめではなく、自分を教育し自ら問いを持ちモラルを高揚させるといった陶冶と訓育を担い自分を高めるものである。教育はただの知識の授受ではなく教師の人間性あってのものだと感じた。(K. A)

・「教育は対象の理解に始まる」。私はこの言葉の意味の大きさを感じた。先生の授業の分かりやすさはこの熱意から生まれたものだと感じた。(Y. K)

・「受講者ノート」、次もがんばって書こうと思えたのは毎回の先生のコメントです。私の母は小学校の教師、1クラス30人を見るのも手いっぱいなのに200人以上と伝えると驚いて今までの私のノートを見せてほしいと頼まれた。初めて読む人もこの授業の内容が分かるという。「受講者ノート」は紙面授業。一生残るものにします。(T. A)

・授業は教師、生徒との対話で成り立つ。大学に入ってより強く感じるようになった。200人以上の講義、自分がしっかりしていなければ何も得るものはないほどコミュニケーションが為されていない。しかし、この講義は違った。「受講者ノート」がその証である。どうやらこのノートは私の一生の宝となりそうです。(K. K)

・「受講者ノート」の機能は私自身が毎回体感。沢山のことを学び取った。(I. S)

4 「社会科教育方法論」における「受講者ノート」活用の考察

教授・学習過程には5つの原理が付随し、「受講者ノート」は1クラス200名を越す大講義

集団においてもその原理を起動させる機能がある。アンケート調査結果によると、「受講者ノート」の原理について個別の学習者理解、三方向のコミュニケーションの維持、問いを立てる能力の順に認める回答が多い。(2006年度他大学における調査では個別の学習者理解、三方向のコミュニケーションの維持、自己教育性の促進の順で回答が多い¹⁴⁾。)

これは受講集団の規模を問わず学生が教授・学習過程において、「個別の学習者理解の原理」、「三方向のコミュニケーションの原理」「自己教育の原理」の充足を特に求めていることを表している。合わせて、教授・学習過程における「学習集団成長の原理」が「受講者ノート」において充足されていることが分かった。

その他の機能については教師の在り方を問う記述が多い。受講者は授業内容に限らず授業方法、授業者の姿勢・態度にも関心を示していることが分かる。

IV 「社会科教育」における「受講者ノート」活用の実践 2

大講義「社会科教育内容論」(2008年後期)における社会認識形成と論述基礎力の育成

1 授業計画の概要

平成20年度「社会科教育内容論」は、次の計画で実施した。特色ある社会科授業論は3回、各学年の社会科授業論は4回、社会的論争問題の教材開発論、社会科授業科学論、劇化活動、放送教材活用の各授業論、地域調査研究の演習発表3回である。「受講者ノート」の活用は演習発表を除いて11回、そのうち、第8回「社会的論争問題の教材開発、授業論」(2008年11月14日)の「受講者ノート」と第9回「社会科授業科学論」(2008年11月21日)の「受講者ノート」の一部を記すと次の通りである。

2 「受講者ノート」活用の実際

(1) 第8回「受講者ノート」における論述基礎力育成の状況

第8回「社会的論争問題の教材内容、授業論」の「受講者ノート」では、通常の内容項目に加えて、そこで見られる論述基礎力向上のポイント

トを示し、該当するノートの一部を掲載した。その一部を記すと次の通りである。

i 講義のテーマ、ねらいの記述：よいノートは書き出しがよい。

・「社会科授業で公民的資質は養えるか」という問いから今日の講義は始まった。公民的資質を育てる授業の教材として「ダム建設事業」が事例として示された。ダム建設はいわゆる「個と集団の利の対立」であり、恒常的な社会的論争問題である。(T.Y)

ii 時系列に基づく講義内容(学習事項・学習内容)の記述

テキスト、文献等から必要事項を引用するなど正確な知識の記述を行う。

・今日の講義では前半は「社会科授業で公民的資質は育つか」、後半は「社会的論争問題」「土師ダムの教材開発」について学習した。(N.A)

・今日学んだことは「社会科授業で公民的資質は育つか」ということだ。「公民的資質とは、社会生活のうえで個人に認められた権利はこれを行行使し互いに尊重しあわなければならないこと、また、具体的な地域社会や国家の一員として課せられた各種の義務や社会的責任があることを知り、これらの理解に基づいて正しい判断や行動のできる能力や意識を指すもの」と昭和44年版小学校社会科指導書にある。(略) (T.H)

iii 特に理解を深めた事項の記述

・資料を読み進めるうちに私は「社会科授業で公民的資質は育つ」と考えた。「県民の願い」と「土師ダム建設の経緯」で個と集団の利害の対立を読み取り、個が犠牲を強いられるやむを得ない状況が学べたからだ。(H.Y)

iv 講義内容全体、又は一部についての考察：よいノートはまとめの記述がよい。

・堤先生の「知る→分かる→考える→行う」の四段階の学習過程のうち、「行う」に重点を置く授業は一見、よい指導法であるように思われた。しかし、今日の授業を受けて、「行う」だけでなくその前の「知る→

分かる→考える」ことがあってこそ「行う」行為が生きるのだと実感した。事実認識をおろそかにしてはいけない。(N.M)

v 今日の講義で想起したことなど関連事項及び自己課題の記述

・私は山口県川上村に住んでいた。土師ダムと同様「川上村と人々の暮らし」について学んだ。今の当たり前が先人の努力や苦勞に基づくことが分かる。(K.Y)

・京都御池通(中京区)整備の際JR二条駅周辺で立ち退き・土地提供者が昔いた。「住み慣れた土地を離れるのはつらい」と文房具屋のおばさんが言っていた。(Y.M)

(2) 第9回「受講者ノート」における社会認識形成の状況

第9回「社会科授業科学論」の「受講者ノート」は、1社会科学習原理(4名)2社会科授業設計の二側面(3名)3事実認識から価値認識に至る社会科学習原理(4名)4単元「土師ダム」の教材・資料の客観的機能(7名)5今日の授業と経験想起、自己課題(8名)計26名の記述から成る。内13名は初掲載の学生のノートである。

また、第8回の「受講者ノート」の論述基礎力育成の記述に学び、書き出しとまとめの記述に工夫が見られたノートは79/134名、59%いた。その一部を記すと次の通りである。

①事実認識から価値認識に至る社会認識形成の記述

・今日の講義では「授業は個別的に創られるか、客観的に創られるか」について考えた。(略)土師ダム同一資料による年度別反応で子供が水の大切さや水没地区民の気持ちに気づいている。事実認識を行っただけで価値認識までできるものかと驚いた。(Y.Y)

・土師ダムの資料では先生は「水を大切にしない」とは言っていない。ダムを作る側と水没地区住民の事実の記録資料である。子供の反応を見ると「水は大切だ」という認識の芽生えがある。子供自身による自然な認識過程が重要だと思う。(H.S)

・今日の講義で私の社会科授業観が変わった。

社会科は暗記するのではなく事実をしっかりと明確にし、それを基に自分の価値観を創っていくことに感動した。(O.M)

②発問と教材・資料の客観的機能による社会認識形成の記述

・学習指導細案は授業の中での問いと答えのコミュニケーションを具体化したもの。教師がこれを豊かに描けるほど授業時の子供の発言の受容と組織化は有効となる。(略)高校の授業は概念的知識ばかりで具体的資料と発問がなくわくわくできない。(T.E)

・子供の発言の質が高いのはその背後に教師の発問の高さがあるというのは新しい発見だった。教師の問いの力は子供の発想を豊かにさせるために重要である。(S.M)

③自己の経験想起による社会認識の深化、統合の記述

・私は教材「土師ダム」の中にある「立ち退く人々への償い」を読み、大戸川ダム建設のために立ち退いた人々のことを思い出した。土師ダムのように人々の生活になくってはならないダムになっても、立ち退いた人々の心の痛みは消えないけれど、大戸川ダムのように建設が中止になってしまったら、このむなしさをどこにぶつけたらいいのかと思うと、心が痛みます。(K.H)

・私は香川県出身なのだが、香川はここ数年水不足に悩まされている。京都では水道をひねると必ず流れる水であるが、香川は夜になると水が止まったり、トイレの水も流れないほど。ダムはあるが雨が降らないという現状。有名なうどんも水はなくてはならない。香川の子供はこの事実を受け止め節水を心がけている。子供のうちから地域を知り自分達で活動している香川の子供を地元ながら素晴らしいと感じる。(M.A)

④社会的態度の自覚の記述

・私の住んでいる宇治市、天ヶ瀬ダムに何度も足を運んだことがあるが、土師ダムと同様立ち退きを求められた人もいるだろう。家に帰ったら祖父母に市民の動きや歴史を聞いてみたい。(O.A)

・今日の講義で山口県の人が発表してくれた。自分の知識を他の人と共有することで双方に学習意欲が増すと思う。小学校でも取り入れたらよいと思う。(S.M)

・様々な地域から私たちがこの大学に集まり、様々な地域のことを知ることができること自体がすでに社会科の学習になっていると思う。感謝しないといけない。(Y.A)

3 「社会科教育内容論」における「受講者ノート」活用の考察

「受講者ノート」は、社会科教育方法論、社会科教育内容論において社会認識形成と論述基礎力の育成に有効である。まず、テーマ・ねらいを明確にして講義内容を時系列にそってまとめ正しい情報整理を行う。その後、各学生の関心に基づき多様な解釈、考察を行い、文末には関連情報の想起も加えて社会認識の統合・深化と自己課題のまとめを行う。上記の論の展開は、各学生から自ずと生まれ、これを「受講者ノート」で公表すると受講集団に共感、共有の輪が広がり、善さへの連鎖として、次回の「受講者ノート」の社会認識の記述と論述基礎力の表現に好影響をもたらす。

「人の考えを知るということは、先生のみ意見でないことを知ることができると共に、それをふまえて時には理解が深まり、新たに教えられることも多いです。この「受講者ノート」とそれを構成している人達で、もう1回分の角度の違う授業を受けている気にさえなれました」(平成7 T.M)とは、過年の受講者のそれに対する共感である。今回の実践でも受講者相互のかかわりによる社会認識形成と論述基礎力の向上が見られた。

V 結語

「社会科教育法」教育の教授方法の改善に関する研究として、大規模授業(200名前後)における「受講者ノート」活用の機能の検証を図った。その結果、「受講者ノート」には通常規模(70名以内)の授業と同様、学習者、授業者双方に次の機能を起動させることが明らかになった。合わせて、授業における教師と学習者

間の在り方を一考する手がかりも得ることができた。学習者に対する機能は次の4点である。

1つは、「受講者ノート」活用による学習者にかかわる諸側面である。個別の学習者理解(学習者理解の原理)、問いを立てる能力の涵養(自己学習の原理)、自己教育性の促進(自己教育の原理)の充足である。授業に臨む学習者の自己存在感、自己学習状況、自己教育の構えなど個別の学習者に対する授業者の尊重、態度が「受講者ノート」活用に表れ、学習者の姿勢、態度を旺盛にしていった。大規模授業においても「受講者ノート」は個々の学生の受講姿勢、受講内容、受講態度に深くかかわる学習条件を備え、作用していたと言える。

2つは、「受講者ノート」活用による教授・学習過程におけるコミュニケーション活動(三方向のコミュニケーションの原理)の充足である。授業は、本来、認識過程と社会過程の同時的過程¹⁹⁾であり、教師と学習者間の社会的諸経験の交流が講義内容の認識過程と付随して進行する。学生が授業の中で教師及び学生相互間でのコミュニケーション活動に賛意を示すのは、この授業本来の在り方への願望である。「授業は教師、生徒との対話で成り立つ。大学に入ってより強く感じるようになった。200人以上の講義、自分がしっかりしていなければ何も得るものはないほどコミュニケーションがなされていない。しかし、この講義は違った。「受講者ノート」がその証である」(前掲96頁)とは学ぶ生徒の本心であろう。それゆえ、コミュニケーション活動が充足された授業では、授業計画の進行に伴い「学習集団」の機能(学習集団成長の原理)が活発になる。やがて、受講集団にモラルの高揚が観察されるのは、授業原理に基づく当然の結果である。「友達の記述と見比べる作業を通して本当の意味で授業と向き合い、授業内容と向き合い、学びを深めることができた。木曜2限は眠くなる時がなかった」(前掲96頁)との回答は、従前の受講集団にも数多く見られた共通の反応である。

3つは、「受講者ノート」は論述基礎力の基底をなすコミュニケーション能力向上の必要性

を促している。授業中の生徒は、通常、「話す」「書く」のコミュニケーション活動を行っている。「話す」とは自己外対話、相手が見える社会的活動・自己活動である。「書く」とは相手が見えない社会的活動・自己活動である。元来、コミュニケーション活動とは社会的活動、その自覚が「話す」「書く」の自己活動を促進させる。人によく分かるように話すとは、話す中身の理解の自己活動の深化、人によく分かるように書くとは、書く中身の理解の自己活動の深化につながる。授業終了十数分前まで自己内対話を続けてきた学生は、「受講者ノート」の場の設定により、「書く」ことの社会的活動の自覚を促され、精度の高い論述表現に努めるようになる。『東大合格生のノートはかならず美しい¹⁰⁾』で取り上げたノートと「受講者ノート」の違いは、前者は自分用のノート、後者は他者にも分かるノートである。「私の母は小学校の教師、私のノート(「受講者ノート」)を見せてほしいと頼まれた。初めて読む人もこの授業内容が分かるという」(前掲96頁)の記述は、他者を意識した論述基礎力の向上結果の表現と言える。

4つは、「受講者ノート」活用による授業者・教職への関心の喚起である。受講学生はコミュニケーション重視の授業展開により、講義内容に留まらず授業構成の諸条件に対しても関心を顕在化させている。「「受講者ノート」は単なる学習のまとめではなく自分を教育し、自ら問いを持ち、モラルを高揚させるといった陶冶と訓育を担い自分を高めるものである。教育はただの知識の授受ではなく教師の人間性あつてのものだと感じた」(前掲96頁)「教師になった時、自分もこのような活動をしたい」との回答も毎度の受講学生に共通に見られた反応である。学生からの反応を求めない一方向の授業展開を重ねていると、学生は講義内容にのみ関心を示し、教授方法、教師の役割など授業構成に必要な事項に関する問題意識や研究態度が当面の学習者(受講者)体験からは欠落していくのではないかと思われる。

次に、授業者に対する「受講者ノート」の機能の起動である。筆者は、「受講者ノート」活

用による講義運営を通して、授業における新たな学習者理解の蓄積と授業原理の確認・検証を行うことができた。

まず、授業における学習者理解の蓄積として、全授業の「受講者ノート」の通読を通して、個別の記述内容を自己教育性の四側面のカテゴリーで分析すると、学習者の中には記述傾向に特色があることが分かってきた。即ち、学生の自己教育性に関する記述の経路には、およそ3つのタイプがあることが推理されている¹⁶⁾。1つは、「目的・内容優先記述型」。知的好奇心が旺盛で過去の学習経験・生育歴から現在に至るまで心理的に安定していると思われる学生、2つは、「自己優先、目的、内容記述型」。自己主張が旺盛で過去の学習経験・生育歴から現在に至るまで心理的に安定していると思われる学生、3つは、「安定優先、自己、目的、内容記述型」。学習姿勢が消極的で過去の学習経験・生育歴において教師とのかかわりの距離がやや遠く、心理的に不安定と思われる学生、「受講者ノート」における教師の個別の助言や「受講者ノート」への掲載に対して喜びを表し、自信を回復、学習意欲の向上が顕著に見られ始めた学生の記述である。

今回の大規模授業における「受講者ノート」においても同様の傾向が見られた。なかでも、多人数の受講集団の中にあって教師や学生相互間で日頃目立たないと思われる第3のタイプの学生は、「受講者ノート」が持つ個別の学習者理解、三方向のコミュニケーションの機能に敏感に反応していた。「自分自身すごく成長したと感じ自分の記述に自信が持てるようになった。三方向のコミュニケーションによる教育の力に驚いた」「受講者ノート」、1、2回は書かされている意識が強かった。しかし、書いているうちに「受講者ノート」の記述のため自分の中でもう一度講義をしていくのが習慣になった。自己教育力の促進が意識できるようになった」(前掲95頁)。これに類する記述は多く、大規模授業で学ぶ学生も等しく、とりわけ、強く個別の対応を望んでいることが分かる。講義法は「短時間に大量の知識・情報を系統的に受講者

全員に等しく提示できる利点がある反面、授業に積極的に参加する学生と参加しない学生との二極分解に陥りやすい欠点がある¹⁸⁾」と言われているが、大学全入時代の今日、その問題点は是正されなくてはならない。

「受講者ノート」活用による授業者への機能の起動、2つ目は「受講者ノート」は授業者へ「教師と生徒の協同構成による授業原理」の成果を再確認させている。第8回社会科教育内容論において、1973年(昭和47)広島県土師ダム建設の概要を講義内容の事例として伝え、第9回の「受講者ノート」では各学生から関連情報が集まってきた。滋賀県出身の学生は数日前の新聞報道、大戸ダム建設中止の問題点を取り上げ、香川県出身の学生は県内の数年来の水不足を知らせ、山口県出身の学生は、土師ダム建設にあたり当時の水没地区住民が補償交渉のため先例地ダム見学地として地元の川上ダムに出向いたことに関連して、その川上ダムの様子を語っている(前掲97頁)。授業成立を「教え学ぶ教師と学び教える生徒の協同活動」と捉え、教師の側の学びの側面と生徒の側の教えの側面の強化が真に授業内容を協同で創造、仕上げられていくとする論は至言である¹⁹⁾。筆者は長く、同一授業科目の授業を繰り返しているが、毎度、新鮮な緊張感を伴い新たな授業内容を手にすることができるのは、授業者(筆者)と新学習者との協同活動による授業成立の成果である。

授業における「教師が子どもと向き合う時間」の真の意図は、個別の学習者の反応の受容・評価・助言活動にある。授業内容伝達の教授活動、そこでの教師、子供間のかかわりも重要であるが、子供の学習状況を見極め、自己教育に向けた評価と支援、意欲の喚起を促す教授活動後の子供との対峙の時間も看過してはならない。「受講者ノート」活用の機能は、「教師が子どもと向き合う時間」が持つ教育的意味を示唆している。

「答案は宝の山²⁰⁾」と形容する高校教師の主張と同様、学校教師の教授行為の目的とその教授行為の活力の源泉は、本来、学校教師による学習者の反応・評価の行為にあるのではないか。それを宝と見る見方が、今日、全ての学校教師

に向けられた課題ではないかと考える。

註

- 1) 杉山憲司「大学／学習論」齊藤里美編著『大学教育と質保証』明石書店 2009年 92頁
- 2) 勝木渥「一方通行でない授業への試み」『大学改革—110の事例と提言』朝倉書店 1994年 404頁
- 3) 木野茂「学生とともに作る授業—多人数双方向型授業への誘い」清水亮・橋本勝・松本美奈『学生と変える大学教育—FDを楽しむという発想』ナカニシヤ出版 2009年 136頁～141頁
- 4) 「教育職員養成審議会カリキュラム等特別委員会審議経過報告」文部省 平成9年5月
- 5) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 平成20年1月17日『初等教育資料』平成20年3月号 66頁～175頁
- 6) 拙稿「『社会科教育法』教育の教授方法に関する研究(3)—「受講者ノート」の活用を中心として」岐阜聖徳学園大学紀要第47集 2008年2月 75頁～77頁
- 7) 坂元昂『授業改造の技法』明治図書 1980年 28頁
- 8) 梶田毅一「自己教育とは何か—基本的な四側面七視点について」北尾倫彦編『自己教育力を考える』図書文化 1987年 19頁～27頁
- 9) 川野辺敏(国立教育研究所)「自己教育力を考える」『教育けんきゅう』NO.14 広島県立教育センター 1986年 3頁～10頁「自己教育力」の概念は、中央教育審議会教育内容等小委員会審議経過報告(昭和58年)に始まる。川野辺はそれを受けて「自己学習力」との違いを陶冶と訓育の概念を用いて説明している。
- 10) 片岡徳雄「学習集団」細谷俊夫、奥田真丈『教育学大事典』第一法規 267頁～268頁
- 11) 前掲5)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」167頁
- 12) 河野重男「教育改革と自己教育力の育成」北尾倫彦編『自己教育力を考える』図書文化 1987年 2頁～11頁
- 13) 前掲6) 77頁～79頁に類似の項目の詳細な記述がある。
- 14) 前掲6) 81頁
- 15) 木下百合子『現代公民科教授の理論』教育出版センター 1991年 141頁
- 16) 太田あや『東大合格生のノートはかならず美しい』文芸春秋 2009年3月
- 17) 前掲6) 89頁～90頁に詳細な記述がある。
- 18) 吉本均「講義法」奥田真丈、河野重男『現代教育学大事典』③ぎょうせい 1994年 61頁
- 19) 前掲15) 145頁
- 20) 宇津木大平(高校教員)「答案は宝の山 教師が採点を」朝日新聞『声』2007年(平成19年)4月11日、答案には指導上大切な情報が含まれており、全国学力調査の採点は教師が行うべきだと意見を述べている。